

## △卒論の読後感▽

——上代

中島 悦次

昭和四十年四月本校が開校されてから、やがて第五期の卒業生を送ることになる。早いものでこの間五期に亘って七十余篇の卒論を閲読することになる。そしてそれぞれに心をこめたこれら貴重な論文の中で特に気づいた点から視て、次の三つの特長著しいものがあると感じられた。

A 資料集めを主として研究感想を従としたもの

B 資料と研究感想を半々に扱ったもの

C 感想理論を主として資料を従としたもの

これはどれがよいわるいというのではない。オリムピック競技参加のいくさのようだが、一篇を力一ぱいまとめて見ることに意義があると思う。実際大学で学ぶことは実用的な生活知識はほんの一部分である。ただ対象を見つめて実感の上立ち、自分の納得ゆくまで理論を求め考察を進めるといふ態度を身につけることが主眼であろう。それがあれば更に学問研究を志すなら、大学院へ進学して研究を積み理論を究めることもできるし、社会に出ても家庭に入っても、事に当って理性を失わず心に余裕を持って教養を生かし合理的に対処することができると思う。

論文の書き方は殊更従来の型に倣<sup>ノボ</sup>めないでも、主題(テーマ)でも研究態度でも、もっと自由奔放であっていいと思う。人にはそれ

ぞれ得意、不得意があり。例えば、資料を一所懸命集めたが、どうしてもまとめがつけられないというのがあるが、それが或る程度目的に即して分類した資料集めなら研究への努力として決して軽視することはできない。又どうしても結論が導き出せないというのもあるが、実感から出たものなら研究過程の報告だけでもよい。かと思つて、僅かな資料から堂々と理論や感想を展開したのは、論理が整つていて、新鮮な、創意的なものであるなら、それはそれでよいと思う。私なども年ばかりとつても一篇をまとめることは中々容易ではない。皆さんのように若い時は、たとい未完成でも未熟でも全心を傾けたものには、個性が表われ若さがあふれ情熱がこもっているので頼もしくも好もしくもあると思う。

つまり国文科の卒論は、必ず自力で資料を熟読した実感を基礎として観察考究し得た過程を、型にかかわることなく、とにもかくにも或る程度の長篇にまとめ得たら、将来或は懐かしいとまではいかないかも知れないが、在学時代の若い心に何かプラスしたという思ひ出にはなるうと思う。

(昭和四七年二月二日記)

## 卒業論文のことども —— 中古

室伏 信助

卒業論文というと必ず思い出されることがある。私が卒業論文を書いていたころ、ある教授が「近ごろの学生は卒業論文のことを